

『東京ミルク物語』に 117 ページにおきまして誤りがございました。

読者の皆様ならびに関係者の皆様にお詫び申し上げるとともに、以下のとおり訂正いたします。

誤

正

### ⑤ 1893 (明治26) 年 ● 牛乳受箱の始まりは

『民具マンスリー』第 47 巻7号、松本友里、神奈川大学日本常民文化研究所 (2014 年) には牛乳受箱の始まりが紹介されており、その中から要約します。

現在、牛乳瓶をガチャガチャ鳴らしながら各家庭へ届ける配達人の姿はほとんど見られなくなりましたが、当時は木製の牛乳受取函(牛乳受箱)が玄関先に置かれ、そこに牛乳缶が納められていました。

牛乳受取函の歴史は古く、1893(明治 26) 年発行の『万民必携電話広告録』によると、郵便や牛乳受函を製造販売する福祿屋(東京市神田区通新石町)が最初であると記録があります。専売特許をもつ「牛乳受函」は、函の中にある鍵に当時の牛乳缶を吊るしておくで函の蓋がしっかり閉まる仕組みです。鉤が無ければ開けることができず、盗難や牛乳に砂や汚物を入れられる悪戯も防ぎ、とても衛生的でもありました。東京市の芝区、本郷区、京橋区のほか、横浜市にも売捌所があり、そこで「牛乳受函」を販売していました。

現在、牛乳受箱は木製からプラスチックに変わり、盗難防止でなく腐敗防止の観点から保冷剤を入れてさらに衛生面が配慮されているんだって。今でも牛乳を配達してくれるんだね。



### ⑤ 1893 (明治26) 年 ● 盗難を防ぐ牛乳受箱の仕組み

1893 (明治26) 年発行の『万民必携電話広告録』には、郵便や牛乳の受箱を製造販売する福祿屋(東京市神田区通新石町)の広告があり、牛乳受箱の仕組みを知ることが出来ます。

明治 20 年代中頃、牛乳販売には金属製の缶が使われ、その牛乳が入った缶は玄関先などに吊されて配達されていました。目に付く場所に引っ掛けられているだけなので盗むのが容易く、その場で牛乳を飲まれてしまったり、缶ごと持ち去られたりする被害があったようです。新聞には巡査に捕まった牛乳泥棒の記事が見られます。そのため、牛乳の盗難を防ぐ受箱が製造販売されていました。

福祿屋の「牛乳受函」は、箱の中にある鉤に缶を吊るすと蓋がしっかり閉まり、鍵を使わないと開けることができない仕組みで、盗難や牛乳に砂や汚物を入れられる悪戯を防ぎ、衛生的であると紹介されています。箱の図も描かれていて、缶が宙吊りになっています。福祿屋は牛乳配達の際に缶を吊す方法を利用して、この「牛乳受函」を製造したのかもしれませんが。

(松本友里「明治時代の牛乳販売における硝子瓶使用の広がり」『民具マンスリー』(2014) 第 47 巻 7 号、神奈川大学日本常民文化研究所)

現在、牛乳受箱は木製からプラスチックに変わり、盗難防止でなく腐敗防止の観点から保冷剤を入れてさらに衛生面が配慮されているんだって。今でも牛乳を配達してくれるんだね。

